



TITLE:

京大広報 No. 77

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 77. 京大広報 1972, 77: 322-324

ISSUE DATE:

1972-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209615>

RIGHT:

京大広報

No. 77

京都大学広報委員会

白馬山の家の開設について

開設以来利用者から好評をうけている白馬山の家を、今冬は12月20日から開設します。

本学の学生および教職員で利用される場合は、下記を参照のうえ、申し込んでください。

この山の家は、北アルプス連峰の山々に囲まれた^{つみけ}梅池高原にあり、建物は山小屋風の木造2階建地下1階で、間取りは主として1階に食堂兼談話室、2階は寝室（ベッドで42名収容）、地下は浴室、乾燥室等からなっています。

記

- 1 名称 京都大学^{はくばやま}白馬山の家
- 2 所在地 長野県北安曇郡^{あづみ おたり}小谷村大字千国字柳久保乙 869 の 2

(交通)

国鉄「京都駅」→中央本線または北陸本線
經由→大糸線「白馬大池」下車(所要時間約8時間)

バス—松本電鉄「白馬大池」→「親の原」下車(所要時間約10分)

- 3 開設期間 12月20日(水)～1月20日(土)
および2月20日(火)～4月20日(金)
- 4 所要経費 1人1泊 宿泊費80円 暖房費50円他に食費等実費程度
- 5 申し込み 詳細は、本学体育会(西部構内総合体育館内・電話学内2574)に照会してください。
- 6 備考 上記の開設期間の頃は、山の家のある梅池高原は積雪が多く、また初級から上級までのスロープがあ

り、スキーも十分に楽しめます。

(学生部)

総合体育館の休館日について

総合体育館は、開館以来全京大のスポーツの殿堂としてひろく使用されていますが、年末・年始の下記の期間は休館します。

記

12月29日(金)から1月4日(木)まで

(学生部)

月曜会メモ

第107回(10.2) 司会 小林恵之助会員

1 会員の交替

経済研究所：佐和隆光会員にかわり、10月1日付け森口親司助教授に交替。

2 話題

大学問題検討委員会から答申された改革案について討論を続行することになっていたが、資料「大学の未来像について(答申)」が各会員に送付されたのが会の直前であり、またその一般公表前であることから、同答申の内容に立ちいった討論に移るのは時期尚早であった。したがって、今回も前回(106回)川村会員から概略説明のあったところを中心に、問題点をあらかじめ指摘することによって、次の具体的な討論に備えることになった。

問題点の指摘は、答申の第Ⅲ部をなす「大学の未来像」に集中された。これは答申の表題ともなっている重点であり、第Ⅰ部「大学の任務」を理念的な総論とすれば、その各論にあたる第Ⅲ部に具体的に反映されているはずである。また第Ⅱ部

「大学の現状と問題点」は、むしろ月曜会が発足以来つとめて情報交換してきたところで、遺漏の有無は答申を熟読しないとわからない、との理解によるものである。

答申の第Ⅲ部「大学の未来像」の骨子は、新しい研究・教育組織の単位として「部」制の採用を提案していることであるが、理念はさておいて、その実現性に対する根本的疑惑として、まず数量的配慮がなされていないのではないかとの指摘があった。たとえば、現在の学生数で「部」制をとるとすれば、教官数を飛躍的に増す必要があるが、これは短時日で行ない得ないはずである。「部」制を考えるに至ったのは、大学のマンモス化が主因であろうから、その縮小が先決ではないか。総合大学としての機能はマンモス化によって既に失われており、これは「部」に再編しても回復されないだろう、等の意見である。また、未来像をもる器として、創設期のような単科大学（カレッジまたはスクール）の連合体へ復帰することは考えられないか。「部」制を組織単位とするならば、それが効果をあげられる適正規模と分野をもった新大学を別に発足さすべきである、等の現状のままの移行をあやぶむ意見が出た。さらにさかのぼって、総長は、この答申をうけてその実現をはかる意志があるのか、大検委も実現の可能性を確信して答申したのであろうか、との疑念を残したまま模索的な本夕の会合は終わり、次回に持ちこされた。

なお、今回は、司会にあたる人文科学研究所の都合により、11月13日（第2月曜）に開催の予定である。（小林恵之助会員）

第108回（11.13） 司会 樋口謹一会員 1 会員の交替

文学部：本城格会員にかわり、10月8日付け武内義範教授に交替。

医学部：藤原元典、翠川修、森本正紀会員にかわり、11月9日付け太藤重夫教授、井上章教授に交替。

食糧科学研究所：佐々岡啓会員にかわり、11月1日付け山田秀明教授に交替。

基礎物理学研究所：位田正邦会員にかわり、11月1日付け佐藤文隆助教授に交替。

2 各部局報告

教育学部より、教職教育・教育実習のあり方について検討を加えてきたが、これを全学的な問題として解決すべく努力しているむね、報告があり、次いで、木材研究所より、審議機関としての教官会議の設置について、教養部より、最近の学生の動きについて、それぞれ報告があった。

3 「大学の未来像について」の答申の討議

今回はとくに、大検委委員第1部会所属の奥田昌道（法）、菅原努（医）、尾上久雄（経研）、各教授の出席をわずらわし、質問、討議をおこなった。討議はおもに答申の第1章「教員の研究および教育の組織について」を中心におこなわれ、出席の大検委委員も云われたように、現状修正でなく、きわめて理念的な構想であるため、いわゆる「部」（そして「系」）の制度に質問が集中し、その現実化とのかかわりにおいていくつかの疑問が提出された。月曜会としても、これからの全学的検討と並行して、次回も引き続き検討することに決定された。（樋口謹一会員）

第109回（12.4） 司会 寺松 孝会員

部局報告として、霊長類研究所川村会員より、同研究所所長選考方法について検討中なる旨報告があった。それ以外に報告事項なく、直ちに意見交換に移った。

主題は、前回にひきつづき、大学問題検討委員会より示された「大学の未来像について」の答申であり、これについて約1時間半にわたって討議が行なわれた。

すでに、9月の例会からのひきつづいての討議であり、今回はかなり全体的な視野からの議論となり、中心的な討議点として、大学教育における人間教育と職業教育に話題が落ちついた。

理想的には、両者が巧みに融合された形で行なわれるべきではあるが、今回の答申によった場合、職業教育の方に若干問題を生ずるのではないかという意見も出された。

答申においては、専門教育なる表現の下に職業教育を包含しているようにも思われるが、専門の細分化された今日、少なくとも理学系の専門教育は即職業教育ではなく、研究者養成であるようである。総合大学への要望範囲が余りにも広いとは

いえ、なお検討を要するところであろう。職業教育のための大学を別にするという案もあった。

理想的な大学像については、今後もなお模索されねばならないところが多いが、今回は、一応討議を打ち切り、本件については時を改めることとした。

次いで、研究所と大学院との関係について現状およびそれについての意見が交換されたが、約30分の検討の後、次回に持ち越されることとなった。

次回は昭和48年1月8日、本件を主題として開かれる。

(寺松 孝会員)